

聖書箇所：ルカの福音書 10 章 25～37 節

説教題：隣人となられるイエス

## 1 律法学者の質問

### (1) 何をしたら

今日の箇所は「よきサマリア人のたとえ」として知られている箇所です。あるとき、律法学者がイエスのところにやって来て、こう質問しました。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

イエスはこう言われます。「律法には、何と書いてありますか。」律法学者は申命記に書かれているみことばを答えます。「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」それだけでは足りないと考えたのか、レビ記のみことばも引用します。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」

### (2) 私の隣人とは誰か

これに対し主は言われます。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」これを聞き、律法学者は思ったでしょう。そんなことは今さら言われなくても、自分はやっている。

あまりにも拍子抜けするような答えをイエスが言ったので物足りなかったのでしょうか。律法学者はもう一つの質問をします。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」こう質問するからには、もちろん自信があります。自分は旧約聖書を信じ、エルサレムで礼拝し、律法に従ってさきげ物をしてきた。同じ聖書を信じるユダヤ人のために力を尽く

してきた。当然、「私の隣人」とは同じユダヤ人のことである。そう確信しています。

律法学者はイエスをためそうとこの質問をしています。ユダヤ人からは罪人と思われているサマリア人のところへ、イエスが頻繁に出かけている。そのことは律法違反ではないのか。そのように指摘してイエスを打ち負かそうとしていました。

## 2 たとえ話

### (1) 祭司とレビ人

そんな魂胆を見抜いたイエスは、一つのたとえ話を語ります。旅の途中で強盗に襲われ半殺しの目にあい、大きな傷を負って倒れた人を巡って三人の人が登場します。まず最初に祭司が通りかかりましたが、反対側を通り過ぎていきました。レビ人も同じでした。祭司もレビ人もユダヤ人に属します。この二人がなぜ倒れた人を避けて通りすぎたのか、いくつか理由があります。

倒れていた人は意識を失っていましたから、びくとも動かない。生きているかそれとも死んでいるのか、見ただけでは判断できません。確かめるためには身体に触れて揺るか、脈を診るとかしなければなりません。いづれにしても身体に触れなければならない。生きているのなら問題がないのですが、これがかもし死んでいたとなると大きな問題が生じます。死体に触れた者は身を汚す。そのような律法がレビ記に書かれています。一度身が汚れてしまうと、かなりの日数を費やして

さまざまな儀式を行わなければ、聖くならない。そのように律法で決められています。かなりの犠牲を払わなければなりません。しばらく考えた末に、祭司もレビ人もその人を助けるのではなく、自分の身を聖く保つことを最優先します。

しかしこれだけでは、後から責任を追究される可能性が残ります。「おまえはユダヤ人を見殺しにしたかもしれない。」その点も抜かりはありません。当時、ユダヤ人であるかどうかは服装で見分けられるようになっていました。ところがこの人は裸です。ユダヤ人であるかどうか、服装で確かめることができなかつた。そう言い訳することができます。

わざわざ反対側を通り過ぎたのは、強盗どもがそばに隠れていて自分も襲われるかもしれないというリスクを考えてのことです。

このようにして、祭司もレビ人も律法について何も問題がないとしました。

## (2) サマリヤ人

三番目に登場したのがサマリヤ人です。サマリヤ人は、イスラエル民族に属してはいるのですが、祭司やレビ人が属するユダヤ人とは非常に仲が悪い。というのは、サマリヤ人はエルサレムではなく、別の所で礼拝すべきだと考えていたからです。そんなサマリヤ人を見て、ユダヤ人は自分たちの隣人のなかにサマリヤ人が含まれることなど夢にも思っていないませんでした。

ところがたとえ話では、そのサマリヤ人が倒れている人のそばにかけ寄り、丁寧に傷の手当てをしていきます。中東の歴史文化を調べたある研究者は、サマリヤ人がユダヤ人の町に入り宿屋に泊まろうとしても無事では済まなかつただろうと指摘しています。まし

て、身元がわからない大けがをした人を宿に連れてくるのです。もうこれは、サマリヤ人がまるでわざわざ殺されるためにこんなことをしているような話なのだと言われています。

## (3) 二つの問題を指摘する

①律法を守るために、倒れている人を見殺しにする

イエスはこのたとえ話を通して、少なくとも二の問題を指摘しています。

一つ目。この律法学者は、律法が大切だと思っています。ところがこのたとえ話では、祭司もレビ人も倒れた人を見ても、律法を守るということを言い訳にして、倒れた人に関わろうとせず通り過ぎてしまいます。現実にもこのようなことがなされていたのです。律法を守っていますと言いながら、いっぼうで平気で倒れている人を見捨ててしまうことが許される。これは大きな矛盾ではないのか。これが一つ目の指摘です。

②隣人でないと思っている者が倒れている人を助ける

二つ目。律法学者は、自分の隣人とは律法を守っているユダヤ人であり、サマリヤ人ではないと考えています。ところが、そのサマリヤ人が倒れていた人を助けます。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という律法を守ったことになります。この矛盾を指摘されました。

(4) 「その人にあわれみをかけてやった人です。」

イエスはたとえ話を語った後でこう質問されます。「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

三人とは、祭司、レビ人、サマリア人です。普通こんなふうに質問されたらどう答えますか。このたとえ話であれば、「はい、サマリア人です」と答えるのが普通です。ところが律法学者は、「サマリア人」ということを絶対に口にしたくありません。イエスは、律法学者が言いたくないことを知ったうえでこんな尋ね方をします。意地悪なのではありません。このたとえ話の核心が鮮やかに浮かび上がるように導いているのです。結局、律法学者はこう答えます。「その人にあわれみをかけてやった人です。」

これがイエスの言いたかった核心でした。

### 3 隣人

#### (1) 律法学者：「私」が隣人を決める

さて、もう一度律法学者の質問をふり返ってみます。彼はイエスに対し二つの質問をしていました。一つ目は25節。「私が何をしたら、永遠のいのちを相続することができるでしょうか。」(私訳) 二つ目は29節。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」この質問をよく見ると、この人が考えているのはいつも「私」のことだと気がつきます。隣人ことを考えるときも、まず「私」が最初に世界の中心にいて、その「私」の周りにどんな隣人がいるか。そういう順番で考えています。別の言い方をすれば、こちらが隣人が誰かを決める権利がある。そう考えていました。

もう一つ付け加えれば、「私が何かをする」という思考パターンです。この思考パターン。べつに律法学者に限ったことではない。この世の常識です。生まれたときからそういう常識の中で育ってきましたから、なにも変だとは思わない。自分が何かをしなければ、望むものを手に入れることができない。それが私

たちの生き方の土台になっています。

#### (2) イエス：「あなた」の隣人となる

ではイエスはどうなのでしょう。イエスの質問をもう一度繰り返します。「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

律法学者の言い方と比べてみてください。律法学者は「私の隣人」と言いました。いっぽうイエスは、「強盗に襲われた者の隣人」と言っています。何が違うか。「私」ではないのです。強盗に襲われ、半殺しの目に遭い、死にかけている。そんな弱い人の立場からイエスは隣人のことを考えているのです。

#### (3) 強盗に襲われたほうも悪い？

こう言いますと、必ず反対意見が出て来ます。確かに祭司やレビ人の態度はほめられたものではないかもしれないが、強盗に襲われたほうにも問題があったのではないか。当時、安全な旅をするためには強盗に襲われるリスクを考える必要がありました。一人ではなく、複数で行動する。少し遠回りでも、より安全なルートを選ぶ。そういうことは常識でした。強盗に襲われたのはこの人の備えが足りなかったせいなのだから、この人にも責任がある。自分の責任で失敗しておきながら、困ったときには助けてくださいというのは虫がよすぎる。そんな人のために税金を使うべきではない。そんな意見をよく耳にします。

### 4 隣人となられるイエス・キリスト

イエスはどうされるのでしょうか。なぜ倒れていたのか、いっさいの事情を聞きません。この人がユダヤ人であるのか、それとも異邦人であるのか、そんなことも関係ありません。

「彼を見てかわいそうに思った。」ただそれだけです。「かわいそうに思う」と訳されていることば。はらわたがちぎれそうになるくらい、心が動かされる。そのような意味です。

こんな言い方は変かもしれませんが、私にはこうとしか言えません。イエスは倒れている者を見ると、みさかいがなくなってしまう。すべてを投げ打って、駆け寄ってしまう。自分の服が汚れることなど、そんなことは目に入らない。倒れている者を助けるためにどんなものでも差し出してしまう。人を助けることで自分が殺されことになっても、それでもよい。自分のいのちよりも、死にかけている者が助かるかどうか、いつもその事を気にかけてくださる。

世の常識からすれば、どう見ても愚かな態度です。どう考えても正気の沙汰とは思われない行動です。でもこれが私たちの主であるイエス・キリストなのです。

律法学者は何かをしなればと思い込んでいました。私たちもそう思っていました。でも私たちは、何もできずに倒れているような状態なのです。律法学者は、自分が誰かの隣人になると思い込んでいました。でも実はそんなことできない。だってこちらのほうが倒れて死にかけているのですから。

そんな私たちのために、主はあわれんでくださり、かけ寄り、いのちを捨てて、私たちの隣人となってくださいました。

そのようにしてくださる主の御名をあがめたいと願います。